

「『侵華日軍間諜特務活動記実』等に描かれた戦前期日本のインテリジェンス活動」報告資料

早稲田大学政治経済学術院 齊藤泰治

○現在の中国が戦前期日本のインテリジェンス活動をどのように描いているか

- ・ 学術データベース
- ・ 書籍類

○目的

- ・ 資料の整理
- ・ 研究傾向の把握
- ・ 根拠としている資料の確認

【1】中国学術情報データベース「中国知網」(2006-2021)

キーワード検索「日本」「侵華」「間諜」「特務」

▷学位論文

- ・ 「東北」「淪陷区」「日偽」「抗戦」「偽満」

▷定期刊行学術誌

- ・ 「華北」「抗戦」「日軍」「国民党」

○「甲午戦争前後日本対華間諜活動」 熊剣平『文史天地』2021 年 7 期

○「鄭州日本間諜案探析」金婷婷『蘭台世界』2021 年 2 期

○「民族意識覚醒の意義——以日本対華間諜活動為例」王俊珍『芸術科技』2019 年 9 期

○「侵華日本の特務組織考略」黄力民 『軍事史林』2019 年 4 期

○「侵華日軍特務組織情報活動」張華濱 『中国档案』2017 年 12 期

○「日特間諜企図策劃回蒙上層人士分裂中国之陰謀探斥」石永紅 魏沢民 『档案』2017 年 12 期

○「抗日戦争時期日本在華特務情報網的設置」王杉 『西北大学学报(哲学社会科学版)』 1996 年 8 期

○「日本侵華三大特務魁首—青木宣純・坂西利八郎・土肥原賢二」孟馳 『文史精華』1994 年 4 期ほか

【2】書籍類

○『日本侵華之間諜史』鍾鶴鳴 華中図書公司 1938 年

第一章 日本間諜史の鳥瞰

第二章 日本在華特務工作発展の経過

第三章 大使館、領事館の諜報組織及びその動態

第四章 日本軍部参謀の上海における特務機関

第五章 驚くべき桃色間諜網

第六章 日本駐華特務機関

「日本の駐華特務機関は駐屯軍の足跡とともに中国へやってきた産物で、駐屯軍の条約的根拠は辛丑和会〔北清事変議定書〕が定めた駐兵規定のみであり、瀋陽から平瀋路に沿って天津、北平に至る。しかし、塘沽協定後、特務機関の拡張は限りなく奥へ向かう姿勢を見せ、平津から数千里離れた寧夏、アラ善旗、多倫、滂江、及び山東の青島、済南、四川の重慶、成都、広東の汕頭等に特務機関が設置された。」

「わが国領土内に設置された特務機関は関東軍と天津軍の2つの本部をともに中心とし、放射型に分布している。」

第七章 秘密報告書

松室孝良の関東軍宛情報

1936年9月 長春 日本駐華偵察会議 「それまでの間諜工作の成果、今後の動向」

1937年2月13日 The China Weekly Review『中国毎週評報』に発表、ソ連『プラウダ』が翻訳

Major-General Matsumuro's Memorandum, Like Tanaka Memorial, Points the Way for Japanese Aggression

走私（密貿易）問題

(1)原料と市場 関税障壁、原料調達

➡華北の重要性

1. 消費者人口 華北は満洲の3倍
2. 生産原料 原料、市場に関する満洲の限界
 - ・緩衝地帯の必要性
 - ・蒙古の軍事上の重要性と開発、市場の難点

(2)政治問題

支那官民

(1)勢力派の聡明

(2)一般民衆

(3)浪人の活動

(4)共産軍と共産党

(5)口実を探す

(6)対華工作

◎松室孝良(1886-1969)

「日本の高級間諜、関東軍参謀、チチハル特務機関長、天津軍参謀、陸軍参謀本部（陸軍総参謀部）付等を歴任。1924年、呉佩孚（直軍）馮玉祥部隊の軍事教官。1926年12月、上校〔大佐〕時、別の間諜官永見俊徳上校とともに蒋介石会見、「蔣を引き込み反共」の謀略任務を執行。1933年、関東軍参謀部第二課長（情報科科長）時、李守信の策反に成功。その後、李守信が蒙古独立の旗印を掲げる日本の傀儡部隊を率いるのを指揮、口北6県に侵攻、占領し、偽蒙政権設立にあたり、多くの引き込み、策反工作に成功した。」『侵華日軍間諜特務活動記実』p.239

◎松室孝良による関東軍への「秘密報告」の検証の必要性

- ・原料、市場をめぐる状況分析
- ・華北に対する評価
- ・満洲に対する評価

- ・ 蒙古に対する評価
- ・ 「支那」と「中国」の混在
- ・ 「敵国」の扱い
- ・ 中国、中国人への評価
- ・ 共産軍、共産党への評価
- ・ 馮玉祥ら軍閥に言及
- ・ 各国連携への評価

第八章 侵華でもっとも著名な何人かの日本人スパイ

第九章 日本探偵活動及び在華破壊工作

第十章 様々な間諜活動

第十一章 日本人指揮下の白系ロシア間諜網

第十二章 日本人策動下の漢奸活動

○『日本特務機関在中国』謝遠達 1938 年

第一章 特務機関の意義

一、半公開間諜機関

二、軍人の外交機関

三、侵略者の先頭部隊

第二章 特務機関の起源と発展

一、日本の浪人から説き起こす

二、樂善堂から日露戦役

三、「九一八」と土肥原

四、長城戦争後

第三章 特務機関の組織

一、華北区 二、華中区 三、華南区

第四章 特務機関の分布

一、華北区 二、華中区 三、華南区

第五章 特務機関の工作要領(一)

一、松室孝良の報告書

二、鄭変中の陰謀

三、和知主宰下の侵晋新綱領

第六章 特務機関の工作要領(二)

四、上海特務会議決議案

五、天津武官会議決議案

第七章 特務機関の活動方式(一)

一、訓練面について

二、情報方面について

(1)情報の掩護

(2)情報の刺探

第八章 特務機関の活動方式(二)

三、策動方面について

第九章 特務機関の発達原因

一、大陸政策の積極的移り変わりのため

二、土肥原個人の驚人的成果のため

三、少壮軍人の気炎の高まりのため

四、領事裁判権の存在のため

五、漢奸が多いため

第十章 中国特務機関取り締まりの経過(略)

第十一章 特務活動根絶の方策(略)

附録 日本軍部対華北軍事侵略計画

○『日本在華間諜網』林克多 雜誌公司 1938 年

○『中日戦争中の女間諜』楊宝琛 編訳 群力書店 1938 年

○『日本間諜与漢奸』海童 正義出版社 1939 年

○『侵略的魔手—日本間諜』許范 訳 漢口大衆日報社〔中蘇文化雜誌社〕 1939 年

○『日本在華の間諜活動』万斯白 上海国光印書館 1945 年

〔○『日本在華の間諜活動(1932-1936)』万斯白 重慶出版社 2014 年〕

▶万斯白(1888-1943)は中国籍イタリア人。1920 年張作霖の特務機関入り、1932 年ハルビン特務機関員、1936 年離脱。

○『日諜秘史』迪肯 著 姜文灝 趙之媛 訳 世界知識出版社 1984 年

○『日特禍華史—日本帝国主義侵華謀略諜報活動史実』王振坤 張穎 群衆出版社 1987 年

○『日本侵略中国東北史』陳善本 主編 吉林大学出版社 1989 年

○『日本侵華七十年史』中国社会科学院近代史研究所 中国社会科学出版社 1992 年

○『侵華日軍間諜特務活動記実』逢復主編 劉建業審校 北京出版社 1993 年

○『日本軍国主義侵華人物』天津編訳中心 編 中国文史出版社 1994 年

○『日本侵華間諜与謀略』劉永祥 常家樹 遼寧大学出版社 1994 年

○『世界間諜人物紀事大全』衛安 達新 主編 時事出版社 1995 年

○『日本特務在中国』蕭宇 團結出版社 1995 年

○『詭狐—日本特工行動档案』張光勤 主編 河北人民出版社 1998 年

○『遠東大陰謀—日本侵華間諜戦』劉振華 江西人民出版社 1998 年

○『侵華日軍高級特務大結局』李一安 主編 珠海出版社 2004 年

○『甲午日諜秘史』戚厚傑 天津古籍出版社 2004 年

○『諜海風雲：日本対華諜報活動与中日間諜戦』吳童 中共党史出版社 2005 年

○『日諜在中国(1895-1945)』戚厚傑 主編 河北人民出版社 2009 年

○『諜影—日本侵華中的間諜秘档』戚厚傑 台海出版社 2013 年

- 『日本侵華図誌(13)―情報与間諜活動』馬振犢 戚厚傑 山東画報出版社 2015 年
- 『近代日本対華軍事諜報体系研究(1868-1937)』許金生 復旦大学出版社 2015 年

書名	『日本侵華之間諜史』	『侵華日軍間諜特務活動記実』	『詭狐―日本特工行動档案』	『侵華日軍高級特務大結局』	『日諜在中国』	『侵華日軍の特務組織』
出版年	1938年	1993年	1998年	2004年	2009年	2019年
板垣征四郎	◎	○	○	◎		○
川島芳子	◎	◎		◎	○	
田中隆吉		○	○	◎		○
土肥原賢二	◎	◎		◎	○	○
坂西利八郎		◎	○	◎		○
松井太久郎	◎	○		○		○

【2】—（1）『侵華日軍間諜特務活動記実』逢復主編 劉建業審校 北京出版社 1993 年 12 月
印刷数：2100

第一章 日本帝国の中央間諜情報機関

- 一、主要間諜情報機関―陸軍参謀本部・海軍軍令部
- 二、外交情報機関―外務省
- 三、綜合情報機関―内閣情報部
- 四、情報活動兼務機関―拓務省、興亜院、大東亜省
- 五、間諜学校―陸軍中野学校

参考文献

- (1) 崑山清行『秘録陸軍中野学校』番町書房〔1971〕
- (2) 天津〔市〕政協編訳組訳『土肥原秘録』中華書局 1980〔原著：土肥原賢二刊行会編『秘録土肥原賢二――一日中友好の捨石』芙蓉書房 1972〕
- (3) 永野信利『外務省研究』サイマル出版会〔1975〕
- (4) 竹内理三『日本近現代史小辞典』角川書房〔1978〕

第二章 日本帝国の反間諜機関（鎮圧機関）

1. 内務省警保局
2. 憲兵隊

参考文献

- (1) 大野達三『日本の政治警察』新日本出版社〔1973〕
- (2) 大谷敬二郎『昭和憲兵史』みすず書房〔1966〕

第三章 日本の著名な男女間諜

- 一、対露謀略工作で大功を立てた高級間諜―明石元二郎
- 二、対露武装特務隊を組織、指揮した高級間諜―青木宣純
- 三、袁世凱、黎元洪から曹錕まで政府軍事顧問を歴任した高級間諜―坂西利八郎
- 四、侵華陰謀活動を一生続けた高級間諜―土肥原賢二
- 五、もっとも早く中国に派遣された高級女間諜―河原操子
- 六、日本名の中国人高級女間諜―川島芳子

七、もっとも早く中国で秘密裏に間諜学校を設立すべく派遣された間諜—荒尾精

参考文献

(1) 『土肥原秘録』

(2) 『秘録陸軍中野学校』

(3) 渡辺龍策『日中スパイ戦争〔戦史〕の断面——女探』早川書房

第四章 日本が中露に派遣した間諜の活動

一、中国へ派遣した間諜

二、ロシアに派遣した間諜

参考文献

(1) 葛生能久主編『東亜先覚志士記伝』日本黒龍会編〔1933-1936,1966 復刻版〕

(2) [中島眞雄主編]『対支回顧録』東亜同文会

(3) 西原征夫『全記録・ハルビン特務機関——関東軍情報部〔の軌跡〕』毎日新聞社

第五章 日本が中国東北に設立した特務情報機構

一、特務機関（関東軍情報部）

ハルビン特務機関 奉天特務機関 間島特務機関 牡丹江特務機関 鶏寧特務機関 綏芬河特務機関
東安特務機関 チャムス特務機関 黒河特務機関 ハイラル特務機関 満洲里特務機関 三河特務機関
興安特務機関 アパカ特務機関 大連特務機関 チチハル特務機関 通化特務機関 承德特務機関

二、保安局 三、満鉄調査部 四、偽満特務警察網 五、日本憲兵隊 六、警務統制委員会

七、偽満憲兵团 八、西南地区対共調査団 九、協和会 十、奉天総領事館警察署、奉天警察署

参考文献

(1) 『全記録・ハルビン特務機関——関東軍情報部〔の軌跡〕』

(2) 『秘録陸軍中野学校』

(3) 『土肥原秘録』

(4) 『档案資料』遼寧、吉林、黒竜江、内蒙公安機関提供

第六章 日本が冀〔冀〕東に設立した特務情報機構

一、唐山特務機関 二、北支特別警備隊 三、日本領事館警察署

参考文献

(1) 『档案資料』北京・唐山公安機関提供

(2) 『土肥原秘録』

第七章 日本が北京、天津に設立した特務情報機構

一、日本憲兵隊、特務機関 二、六条公館 三、茂川機関 四、汪偽特工總部華北工作団

五、金城情報部

参考文献

(1) 『土肥原秘録』

(2)『档案資料』唐山公安機關提供

第八章 山西における日本の間諜と特務機構の活動

一、閻錫山に対する策反工作 二、日閻合作 三、太原特務機関 四、太原憲兵隊
五、太原領事館警察署 六、大同特務機関

参考文献

- (1)鍾鶴鳴『日本侵華〔之〕間諜史』華日〔中〕図書公司〔1938〕
- (2)林克多『日本在華間諜網』上海雜誌公司〔1937〕
- (3)『土肥原秘録』
- (4)『档案資料』太原、大同公安機關提供

第九章 日本が河南に設立した特務情報機構

一、鄭州特務機関 二、新郷特務機関 三、商丘特務機関 四、西山公館 五、梨花公館
六、三陽公館 七、特別調査班

参考文献

- (1)鍾鶴鳴『日本侵華〔之〕間諜史』
- (2)林克多『日本在華間諜網』
- (3)『土肥原秘録』
- (4)『档案資料』河南省公安機關提供

第十章 日本が山東に設立した特務情報機構

一、済南特務機関 二、魯仁公館 三、朝陽公館 四、桜花公館 五、梅花公館 六、千秋公館
七、林祥公館 八、日本憲兵隊 九、青島特務機関 十、青根司令部情報部
十一、青島海軍特務部情報部 十二、青島海軍武官府情報部 十三、阿部偵諜隊、渡辺偵諜隊
十四、芝罘特務機関 十五、芝罘領事館警察署

参考文献

- (1)鍾鶴鳴『日本侵華〔之〕間諜史』
- (2)林克多『日本在華間諜網』
- (3)『档案資料』山東省公安機關提供

第十一章 日本が上海に設立した特務情報機構

一、上海特務機関 二、静安機関 三、上海陸軍部 四、蘭機関 五、梅機関 六、児玉機関
七、登部隊情報室 八、上海領事館特別調査班 九、上海日本海軍武官府 十、汪偽特工總部

参考文献

- (1)『土肥原秘録』
- (2)『档案資料』上海公安機關提供

第十二章 日本が江蘇、浙江に設立した特務情報機構

一、蘇州特務機関 二、第 60 部隊情報室 三、広野部隊情報室 四、蘇州領事館警察署
五、蘇州憲兵隊 六、杭州特務機関 七、東機関 八、杭州憲兵隊 九、土橋部隊情報室
十、槍第 7331 部隊情報室 十一、槍第 2339 部隊情報室 十二、梨岡部隊情報室
十三、守第 6306 部隊情報室 十四、舟山海軍基地司令部情報組
十五、上海日本海軍武官府舟山群島諜報隊 十六、海軍砲艇隊情報組

参考文献

(1)『档案資料』江蘇、浙江公安機関提供

第十三章 日本が湖北、湖南に設立した特務情報機構

一、漢口陸軍特報部 二、漢口海軍特報部 三、鏡部隊情報室 四、漢口領事館警察署
五、汪偽特工總部武漢区 六、湖南公館

参考文献

(1)『档案資料』湖北、湖南公安機関提供

第十四章 日本が江西、福建に設立した特務情報機構

一、九江情報機関 二、九江領事館警察署 三、九江憲兵隊 四、大賀部隊情報室
五、南昌警備司令部情報室 六、福州領事館情報科 七、福州海軍武官府
八、厦門特務機関 九、厦門機関 十、厦門領事館警察署 十一、厦門菊機関
十二、厦門鉄公館 十三、厦門海軍司令部警察本部 十四、厦門海軍武官府
十五、汪偽厦門警察局

参考文献

(1)『档案資料』九江、南昌公安機関提供

(2)『档案資料』福州、厦門公安機関提供

第十五章 広東における日本の間諜および特務情報機構の活動

一、派遣間諜

青木宣純 多賀谷 柴五郎 勝間田善作 中野順三郎 呉松青 今井芳子 王振謙、荀積玉
徐重光 詹江楓

二、汕頭特務指揮部 三、第 23 軍参謀部第 2 科 四、広東特務機関 五、広州菊機関
六、広州竹田機関 七、広州松機関 八、広州吉野機関 九、湛江高杉機関
十、広州加加美機関 十一、広州三角機関 十二、広州林機関 十三、広州原機関
十四、海南海軍特務部 十五、広東憲兵隊、海南憲兵隊

参考文献

(1)『土肥原秘録』

(2)鍾鶴鳴『日本侵華〔之〕間諜史』

(3)林克多『日本在華間諜網』

(4)『秘録陸軍中野学校』

(5)『档案資料』広州、海南島公安機関提供

第十六章 日本降伏後、日本特務が米特務指揮下で継続した活動

一、天安門砲撃の陰謀 二、間諜船「第十七明神丸」 三、間諜船「旭洋丸」 四、大陸問題研究所
五、有末機関 六、NYK嬢 七、侵華日本特務が再「訪中」

参考文献

(1)吉原公一郎『謀略列島』新日本出版社〔1978〕

(2)市川宗明『諜報機関』廣濟堂〔1978〕

(3)『档案資料』京津滬公安機関提供

第十七章 日本高級特務と軍政大員簡介

大迫通貞	大川周明	小山貞知	小日向白朗	小沢開策〔作〕	山本条太郎
山本五十六	山家勸〔亨〕	山梨半造	川島浪速	川本芳太郎	川上操六
下村定	土居明夫	土井市之進	久原房之助	太田宇之助	日高富明
内田良平	今井武夫	中島成子	中島辰次郎	中島信一	中島万蔵
井上日召	井戸川辰三	田中隆吉	田中義一	甘粕正彦	矢崎勘什〔十〕
白光	四天王延孝	石原莞爾	石川伍一	永田鉄山	本庄繁
本間雅春	平岡浩太郎	平等文成	古閑二夫	辺見勇彦	辻政信
西原亀三	西原征夫	宇都宮太郎	米内光政	有末精三	多田駿
寺内寿一	町田経宇	村岡長太郎	阪田誠盛	李香蘭	杉山元
佐藤賢了	武藤信義	谷荻那華雄	近衛篤磨	近衛文磨	門屋博
和知鷹二	和田勲	花田伸之助	河本大作	河辺虎四郎	花谷正
板垣征四郎	松井石根	松井太久郎	松本武雄	松岡洋右	松室孝良
林義秀	岩井英一	岩畔豪雄	岡村寧次	児玉誉士夫	阿南惟幾
東条英機	長谷川市	岸田吟香	来栖三郎	島弘毅	柴五郎
柴山兼四郎	秋草俊	後藤新平	茂川秀和	津田静枝	建川美次
柿崎進	秦真次	鈴木貞一	高谷覚蔵	梅津美治郎	酒井隆
荒木貞夫	根津一	根本博	福島安正	頭山満	橋口勇馬
橋本欣五郎	細木繁	渡辺清茂	渡辺渡	新栄国城	野村吉三郎
菊池武夫	影佐禎昭	富永恭次	鍋山貞親	盛島角芳〔房〕	遠藤三郎
緒方竹虎	広瀬栄一	勝間田善作			

参考文献

(1)朝日新聞社編『現代人物事典』三省堂〔1977〕

(2)『日本人名大事典』平凡社〔1977〕

(3)西原征夫『全記録・ハルビン特務機関——関東軍情報部〔の軌跡〕』毎日新聞社

(4)渡辺龍策『日中スパイ戦争〔戦史〕の断面——女探』

(5)『土肥原秘録』

(6)『秘録陸軍中野学校』

【2】— (2)『日諜在中国(1895-1945)』戚厚傑 河北人民出版社 2009 年

印刷数：3500

前言 軍刀の背後の暗箭

第一章 間諜の国

一、庭番から間諜

二、間諜体制

三、反諜（防諜）

四、間諜を優遇

第二章 魔手千幻

一、間諜選抜

二、魔鬼百面

三、魔手百変

第三章 入念な対華謀略

一、中国盗描

二、地図窃盗

三、兵要地志の収集、整理

四、満鉄スパイ網

第四章 戦争はとっくに始まっている

一、敷き詰められたスパイ網

二、日本のスパイに対する蔣介石の恐怖

三、“七七”（盧溝橋事件）前のスパイ網

四、中国陸軍配置調査

五、華南のスパイの影

六、中国空軍調査

七、分裂、動乱を起こす

第五章 毒蛇妖姫

一、カラチン旗情報基地の中心人物——河原操子

二、男装の麗人スパイ——川島芳子

三、上海の妖諜——阪〔坂〕西恵子

四、妖カメレオン——薩多烏斯喀亞

五、「満洲」女スパイ——景慧貞

六、中国に嫁いだスパイ——今井芳子

七、看護師を隠れ蓑にしたスパイ——中島成子

八、「帝国の花」——南造雲子〔杉野元子「日本人スパイ南造雲子をめぐる言説の生成と展開」(2016)『芸文研究』は、仇章『遭遇了支那間諜網』(1943)が出所と推定〕

第六章 つかまれた狐の尻尾

一、中村事件

二、成都事件

三、鄭州でスパイを逮捕

四、南苑スパイ事件

第七章 「第三の戦場」

一、経済的略奪

二、軍事偵察

三、前線特務工作

四、師団宣撫班

五、法幣偽造

第八章 見えない戦線

一、会道門を利用

二、宗教組織を利用して抗戦を破壊

三、偽装浸透策略

四、「娼妓〔利用〕策」

五、「裏切者〔利用〕策」

六、「少年」スパイを訓練

第九章 要人暗殺

一、中国に対する日本初の斬首行動——張作霖爆殺

二、降服勧告失敗後の仕打ち——呉佩孚暗殺

三、抗日英雄に手を下す——馬占山殺害を謀る

四、断固たる抗日者への打撃——于学忠暗殺未遂

五、全面侵華後の斬首行動——蔣介石暗殺計画

六、外交難局を挽回する手腕——宋子文謀殺未遂

○まとめ

- ・大部の資料集
- ・事実関係を記述した研究書
- ・読み物的要素を重視した書物
- ・新しい研究動向